

ということなのだと考えられる。

だが、実際には「現代児童文学」出発から十年ほどで、早くも別の様相が見え始める。七〇年代初頭から、事実上の「共有」現象が明らかに認められるようになるのである。まず創作児童文学をみれば、七二年には、新しい短編ファンタジーとして安房直子『風と木の歌』（美業之日本社）、またカルヴィーノに影響を受けた安藤美紀夫『でんでんむしの競馬』（偕成社）が刊行される。いずれも、子どものみが対象というよりは、もう少し広汎な読者が受容者として想定されるような作品である。

次に、理論社からは「理論社の大長編シリーズ」、福音館書店からは「日曜日文庫」が刊行開始となる。前者所収の灰谷健次郎『兎の眼』（七四）がやがて大人の口コミから爆発的なヒット作となったことは言うまでもない。後者所収の上下二冊、日向康『果てなき旅』（七八・七九）は第六回大佛次郎賞受賞に輝いた。

やや遡る刊行となるが『八郎』（福音館書店、六七）、そして『花さき山』（岩崎書店、六九）、『モチモチの木』（同、七一）と続く斎藤隆介・滝平二郎コンビによる絵本は、一般にも広く「絵本」普及のブームを起こした。「岩波の愛蔵版」所収のサン＝テグジュペリ『星の王子さま』（六一）がいわばファッションとしての児童文学の先駆けとなって

いったのもこの時期であっただろうか。

さらに少し外側に目を向ければ、一般の文庫への児童文学作品収録が進んだのも七〇年代である。特に七一年創刊と後発であった講談社文庫は、松谷みよ子『竜の子太郎／ふたりのイーダ』（七二）、佐藤さとる『だれも知らない小さな国』（七三）と、早い時期から積極的に戦後の創作や翻訳作品を収録・刊行していった。なお、当時は岩波文庫・新潮文庫と並ぶ御三家的存在であった角川文庫も、いぬいとみこ『木かげの家の小人たち』（七二）ほか、神沢利子や山中恒の作品などを収録・刊行していった。ちなみに私は七〇年代半ばに大学生であったため、「幼少時にはまださほど普及していなかった）現代児童文学の作品を、ふつうに文庫で購入し、読書する」体験をした大人読者となりえたのだった。

このように、創作で描かれる新たな世界の開拓、児童書における新たな形態、児童書の一般読者拡大、一般の文庫への収録といった状況の進行が見られるわけだが、これは同時代では、たとえば今江祥智「もう一つの青春」（灰谷健次郎責任編集『叢書児童文学第四巻 子どもが生きる』（世界思想社、七九）所収）のように、「越境」という語で語られることもあった。

しかし、「現代児童文学」をある時期の特殊なものとしてみようとする試みである本論としては、以下のように捉